

## ケアポート板橋 特養3階

症 例 概 要 利用者：90代 要介護4

病名：アルツハイマー型認知症、肋膜炎、右手首手術 脱腸手術

利用サービス：ケアポート板橋 特養3階(入所平成27年10月)

経過：グループホームかもめの家より入所。食事の時間をとても楽しみにされており、提供した食事は毎回完食されておりました。しかし、令和2年頃より体調を崩し、ご自身で食事摂取することが難しくなり全介助にて対応するも徐々に食事は低下。再度ご本人が楽しみにされていた食事の時間を取り戻したいと、施設初の「ハーフ食」を導入。無理のない食事摂取とご本人のペースに合わせた介助により、活気・笑顔を取り戻すことに成功。更にはとても毎回楽しみにされていた音楽活動へ参加できるまで体力・気力を回復することができた事例。

### 内 容

生活に対するご意向を伺うと、「美味しい物が食べられたら満足なんです。私」と仰り、食事を嬉しそうに、そして美味しそうに召し上がる利用者さんでした。しかし令和2年秋頃より体調が優れず、居室で過ごす時間が長くなります。右手の拘縮も進み、徐々にご自分で食べる事も難しくなり、介助で召し上がって頂くも以前の様には召し上がられず、苦痛の表情を浮かべる事も増えていきました。

令和3年11月に大きく体調を崩され、再度居室で過ごす時間が増えてしまいます。食事摂取は全介助となり、開口も小さく食事・水分摂取量の低下に伴い体重は減少。活気も減退し、以前のようにお話をすることも少なくなり、表情も乏しくなっていました。

嚥下力の低下や口腔内に食べ物を溜め込んでしまわれる為、早急に往診歯科と連携し、ミールラウンドや義歯を調整。少しずつ摂取量は増えて行きましたが、一度に召し上がることのできる量には限りがあること、そして食事介助にかかる時間が十分に確保できず、ご本人の「食べたい」という気持ちと、介助者による「食べて頂きたい」という気持ちの乖離を解消することができず、ご本人の苦痛の表情は消えませんでした。

現場担当者は、ハーフ食の導入はどうかと名案プログラムを活用し提案。初めての試みであった為、近隣特養へ導入実績を尋ねたところ、1か所導入している施設を確認。以後管理栄養士同士で情報交換ができる様になり、令和3年12月より実施を開始しました。上長と連携し、管理栄養士・ケアマネジャー指導の下、3食共に半分量での提供、昼食時・15時に高カロリーの提供を行いました。食事を

減らしながらも体重は増加。以前に比べ、介助中に苦しそうにするご様子は和らぎ、笑顔でお食事を召し上がる日が増えていきます。

それに伴い、発語も増え、表情も柔らかく声を出して笑って下さる事も多く見られる様になりました。体力が戻ってきたこともあり、離床時間も増え、若かりし頃コーラス部に属していたご本人がとても楽しみにされていた音楽クラブに参加できるようにまで回復され、活き活きとした生活へと繋げることができております。

栄養バランスを考えると、利用者さんに全量召し上がって頂きたいと介護職は考えてしまいがちですが、ご本人の「食べたい」という気持ちと反してしまうと、食事を楽しむことができなくなり、結果生活の質を下げってしまう事に繋がると考えます。今回の「ハーフ食導入」は、既存の考え方や仕組みに縛られることなく、新しいことにチャレンジするという、まさに理念を実現させた事例と考え、キラキラ介護賞に推薦させていただきます。